

おおきなはなびのおおきなおと

常陸大宮市立山方南小学校 一年 佐藤 一成

たのしみにしていた、あゆのさとまつりのひがきました。ゆうがたからあめがふっていたので、はなびたいかいができるかどうか、とてもしんぱいでした。おとうさんが、

「きつとだいじょうぶだよ。いつてみよう。」

と、いったので、かさをもつて、かぞく三にんで、おまつりにいつてみることにしました。

あめはすこしふっていたけれど、はなびはもうはじまっています。ぼくたちは、くじがわのはしのうえで、ならんでみていました。きれいなはなびが、いくつもいくつもあがっていました。

ぼくは、いすにすわって、おかあさんがもってきたおかしをたべたり、のみものをのんだりしながら、みていました。

ヒューと、おとのおおきなはなびもあがりました。そのはなびは、かわのみずのそばから、ぐんぐんそらにのぼっていつて、ドオンとおおきなおとがして、パツとあかるくおおきくおおきくひらきました。おおきなおとが、まわりのやまや、ぼくのからだのなかにまでひびいてきたので、とてもびっくりしました。

あんまりびっくりしたので、となりにいたおとうさんのう

でにしがみついてしまいました。そのあとのおおきなはなびのときには、ヒューとそらにのぼっていくあいだに、みみをふさいで、そらをじつてみていました。

からだまでひびいてくるおおきなおとは、ちよつとこわかったけれど、おとのぶんだけ、とびきりおおきくひらいて、とてもきれいなはなびでした。

はなびたいかいがおわって、いえにかつてきたら、きゆうにザアツとつよいあめがふってきました。はなびをみているときに、あめがふってこなくてよかったなあとおもいました。おまつりでは、おおきなおとのはなびにびくりしたけれど、たのしいおもいになりました。らいねんも、みにいきたいです。

大好き いばらき 青なじみ

水戸市立梅が丘小学校 四年 吉武 佳音

わたしの母は、福おか県北九州市の出身だが、いばらき県に住んで、今年で十五年になるらしい。だから今は、すぐくおこっている時か、ね言か、九州の人と話している時にしか北九州弁を使わない。母が方言で話した後、

「お母さん、北九州弁ってかわいいね。いつもそのしゃべり方でもいいよ。」

と、わたしは言うけど母は、

「いやだ。はずかしい。」

と言って、わたしとは、いつも中と半ばないばらき弁で話し

ている。

「かわいいって言えば、この辺では小さい子しかる時『あつぷ』って言うでしょ、ひびきがかわいいと思わない？それと青あぎの事『青なじみ』って言うのも。おさなじみとか顔なじみみたいで友達っぽくていいよね。」

「えっ、あつぷとか青なじみっていばらき弁なの？」

とわたし。母が育った所では、小さい子をしかる時は「だめ」の「め」を使って「めっ」と言い、青なじみは「青あぎ」または「青じみ」と言うそうだった。

「二つとも、いばらき弁じゃないのかなあ。でも、こっちに來て初めて聞いたよ。」

と、母が言うので早速、図書館に出かけた。

県立図書館と市立図書館二か所で、いばらきの方言の本や方言辞典等、合計九さつを調べたが「青なじみ」をいばらきの方言として、しょうかいしているのは、たった一さつだけで、後は千葉県の方言としてのっているものが一さつ、福島県の「黒なじみ」という方言を使うその他の地いきとして、地図上で、いばらき県に印がついている本が一さつあった。九さつの中では、ほとんど同じ方言が説明されているのに「青なじみ」という言葉がのっているのは、一さつだけ。「青なじみ」という言葉自体、知られていない気がして、がっかりした。

「あつぷ」に関しては、それについて書かれている本を見つける事ができなかった。もっとちがう調べ方をするべきだったかなあと思ったが、母が言っていた「だめ」の「め」をヒ

ントに調べてみると、いばらき県のいなしき方面で「だめになる」ことを「ぶつくれる」というらしいと分かった。「あつぷつくれるよ」と言うのが短くなって「あつぷ」になったのではないかとわたしは考えた。もしかしたら、これは大発見ではないかと思っている。

この二つの言葉を通して、もっといばらき弁の事を知りたくなかった。けい語が方言になっっている、他にはあまりないパターンも多くあるらしく、いばらきの人々が礼正しい事がわかりうれしくなった。そして、このかわいい方言と方言を大事にしているいばらき県をたくさんの人に知ってもらいたいと思った。

茨城の「いづろ」に触れて

つくば市立手代木中学校 三年 竹^{たけ}田^だ紗^さ知^ち

「黙想！」凜と冷えた道場に響き渡る大将の掛け声。しばしの静寂が訪れる。かすかに鳥のさえずりが聞こえるだけの空間。軽く眼を閉じ、何も考えず、自分の身体と道場の外に広がる自然の息吹が一つになった様な感覚に浸る…。「やめ、礼！」こうして、私の毎日の剣道の稽古が始まる。

私が剣道を始めたのは小学校四年生の時、中学校で剣道部の大将をしていた兄の試合の応援に行った時に見かけた、女性剣士の凛々しい姿に憧れたからである。茨城県は剣道が盛んで、地域にも有段者で指導してくださる先生方に恵まれていた。小学生の頃は、技がきまって嬉しいとか、試合で勝つ

て「やった」というように、他のスポーツと同じ感覚であった。しかし、私の剣道に対する考え方は中学に入ってから、武道の神様が宿ると言われている鹿島神宮に、家族で訪れた時から少し変わった。

鹿島神宮の鳥居をくぐり、樹齢何百年の杉の巨木の中を進んでいくと、突如古ぼけた道場が現われた。小さな道場であったが、古い歴史ある道場であった。しばらくの間、その道場に佇むと、そこには鳥のさえずり、木の梢が風にかすかにたなびくざわめきの他に何の音もしない。まさに神域と言われるその場所で、何十年、何百年も前から、多くの人々が自然と一体となって武道に励んできたのだらうと思うと、悠久の時を越えて、剣道に励んできた人々の掛け声が身近に聞こえてくるような、深い感慨が沸き起こってきた。昔の人々は、今よりもはるかに生きていくことが困難な時代にいたはずだ。悲しみや苦しみも多かったらう。その中で、武道に励み、稽古でとことん自分を追い詰め、精神を鍛え、礼法で無の境地を探し、自然と一体化し、武道の「こころ」を磨き、そして最後に人生を、生きる意味を悟ったのだらう。

現代の私達の社会。物質的には昔よりはるかに豊かだ。しかし「こころ」はどうだろう。連日の様に起こる凶悪事件、絶えることの無い国際紛争……。息苦しい、いや行き詰まった感が強く漂う現代の日本の社会。わたしたち若者は、これからこの日本を背負って行かなければならないのだ。

「黙想!」……。しばしの沈黙。今の私にとってこの沈黙、無の感覚はとても貴重だ。何百年も昔からこの茨城で、そして日本中で多くの武道を志す人々が同じように感じていた感

覚、自然との一体感。

今の社会はどこかおかしいという人がいる。しかし、社会をつくっているのは、私たち一人一人の「こころ」なのだ。茨城の人々は今でも「質実剛健」や「実直」であると言われる。茨城の地には古くから多くの人々が築きあげた、武道の「こころ」がきつとどこかで息づいているに違いない。伝統とは、きつとそういうことなのだらう。

武道を通して、ふるさと茨城の「こころ」の伝統に触れ、後輩に引き継いでいく。私は、長い時を越えて川の流れのように脈々と受け継がれる、この地だけの「こころ」に触れたことをとても誇りに思う。

茨城の自慢

県立水戸第三高等学校

二年

須^す

能^{のう}

友香理^{ゆかり}

私は、茨城といえは音楽と言っても過言ではないぐらい、茨城は音楽で溢れていると思います。その音楽には、様々なジャンルがありますが、その中から私が特にお薦めするのは、民謡、吹奏楽・マーチング、童謡です。

一つ目の民謡。茨城にあるたぐさんの民謡の中でも代表格は、やはり『磯節』ではないでしょうか。『磯節』は、大洗町磯浜で、舟こぎ唄として誕生しました。後に、酒宴の歌、いわゆる座敷唄となり、明治以後、三味線を使うようになってから全国的に広まり、今では大会が開催されるほど有名なものとなりました。『磯節』は、ただ有名な訳ではありません

ん。「難易度の高さ」でも有名です。地元に住んでいる祖母の親戚に聞くと、

「磯節い!?あれほど難しいのはなかつぺえ。あれに比べたら、演歌なんか、なんてことないべよお。」

と、愛着のある茨城弁で答えてくれました。

つまり、地元の人も認める難易度の高さであることが分かります。

二つ目の吹奏楽・マーチング。これは、何と言っても、全国にも名を残せるほどの強さを持つことです。マーチングに至っては、全国だけでなく、海外にも名を広めています。小学生から社会人までの楽器愛好者が部門に分かれて参加する夏のコンクールで、茨城はかなりの激戦区となります。高校球児が、「一球入魂」で戦うことと同じで、県内の各学生、各団体は、「一音入魂」で戦っているのです。私が所属するアマチュア吹奏楽団の先輩も、茨城は強いと言います。先日参加した大会の理事長も、

「茨城は強い。全国でも有数の強豪校が多い。もつと強豪校を作るためにも、(アマチュアバンドの)皆が頑張つて欲しい。そして、吹奏楽をもつと広めて欲しい。」

とおっしゃっていた。この言葉を聞いて、私は、所属する団体が行っている、老人ホームや幼稚園等で行う依頼演奏や、小中学生への指導ボランティア活動に参加して、子ども達やお年寄りなど様々な年代の人に、音の楽しみ方、音楽の面白さ、楽しさを伝えられるように貢献していきたいと思いを新たにしました。今はまだ、私は団体内では若いので、先輩の様に、楽しみ方や技術指導など、本格的なことは出来ないか

もしれません。だから、音楽の楽しさ、音を出して皆で演奏する楽しさを伝えていけるようになったら、小さな楽しさから大きな楽しさへステップアップできるようにになりたいです。

三つ目の童謡。ここでは、誰もが一度は歌ったことのある数々の名曲を作詞した人を自慢します。その人は、かの有名は作詞家、「野口雨情」です。野口雨情の代表作として、『七つの子』『しゃぼん玉』『証城寺の狸囃子』『赤い靴』など、枚挙にいとまがありません。それぐらい数々の作品を作り上げてきました。曲名を見ただけでも、知っているものがほとんどだと思います。私は、幼い頃、『しゃぼん玉』や『七つの子』『証城寺の狸囃子』を、父や母、祖父母、幼稚園の先生から幾度となく教わってきたので、今でもすぐに歌える曲として頭に入っています。

これらは、私だけでなく、ほとんどの茨城県民が知っていて、音楽が流れると、つい口ずさんでしまうのではないかと思います。

今までに挙げたことは、親から子へ、先生から子へというように、人から人へのリレーとして、今日まで伝わってきたものだと思います。それが途中で途絶えてしまった、ということがあると、全く知らない子ども達が出てきてしまい、「幻の曲」となり、永遠に復活することはなくなってしまう。このようなことをなくすために、私たちや、大人達が、次世代を担う子ども達に伝えていくことが大切だと思います。様々な日常の場面や、季節の歌として、肩肘を張らずに、手軽で楽しい方法で伝えられるよう、私たちや大人が工夫して

いけば、子ども達の頭に入れることが出来、途絶えることもないと思います。そうした活動が茨城の大切な文化を守ったということに繋がれば、とても素敵なことだなと思います。

最後に、子ども達に伝えていくのは、音楽だけではありません。茨城が長い歴史を通じて培ってきた様々な伝統を伝えることも大切です。どのようにして伝えていくかは、私たち次第だと思います。だから、これから先の茨城を作り、守り、素晴らしいと全国に誇れるものになればと思います。

